



金沢大学経済学部
地域経済情報センター
プロジェクトコーディネーター
菊本 舞

地域の生産・生活条件と コミュニティの役割

1. 地域をとりまく状況の変化

グローバル・スタンダードの名の下に国家の枠組みを超えた競争の激化は、地域間の新たな格差を生み出している。歴史を振り返ってみれば、経済や政治の変化は常に地域社会のあり方に変容をせまりまた地域社会をその矛盾の発露の場としてきた。特に資本主義経済の発展は、労働力再生産機能を家庭や地域社会ひいては行政に求めたが、戦後の高度経済成長期には、地域における労働力再生産機能の低下と行政によるその補完の限界が明らかとなっていった。それは農村部では過疎、都市部では過密の現象を通して典型的に現れた。農村と都市における過疎と過密という表裏一体の地域間格差は、総合的に把握され対策が打たれる必要があり、さまざまな形での対応がとられているが、それらが根本的な解決には至らなかったことは、現在の地域の状況を見れば明らかとなっている。農山漁村等のいわゆる条件不利地域の状況はとりわけ厳しい。人口の減少と少子高齢化は止むことがなく、農林水産業の衰退はとどまることなく、地域経済を牽引する産業も育ちにくい。さらに、進行中の三位一体改革および市町村合併は、合併前の町の中心部の空洞化と経済的な衰退および周辺化を引き起こすことが予測されるほか、地域自治の新たなあり方が模索される必要がある等、地域に関する様々な課題をはらんでいる。本稿では、農山村部を中心とする中山間地域を念頭におきつつ、地域の生活と生産に関わる共同条件の確保について考えてみたい。

2. 中山間地域の地域資源の公益的機能

条件不利地域に対する議論として、厳しい財政

状況を背景とした「選択と集中」の名の下に効率的な財政投資を行うべきとする考え方がある。たしかに無駄な公共事業等への財政投資が是正されることは望ましいが、それではこうした農山村についてはこれ以上目を向ける必要はないのであろうか。この問いに答えるためには、農山村の多くがその地域社会の中で長年にわたって担っている役割について考えなくてはならない。それは、近年では環境問題への対応という点からその重要性がとりわけ高く認識されるようになってきている、山や水を含む土地に関わる管理である。長年にわたり地域住民および彼らを構成員とする地域住民組織を主体として、主として集落単位の地域社会全体で維持管理されてきた土地は、それらの多くが私有地や当該地域の^{いりあい}入会であり、地域の生活や生産に関わる共同の条件として機能してきた。だが、実は、山も水も当該地域住民のためのみならず、都市住民の生活にとっても重要な存在である。山林や水路および農地が農山村部で適切な状態に維持管理されることは、流域住民全体の地域での生活において洪水調節機能、生活用水の維持機能、さまざまな生物の生存と成長を促す水源涵養機能等の「環境」をキーワードとする様々な公益的機能を果たしている。あるいは日本の国土面積の半分以上が山地・山間部であることを考えれば、公益的機能は流域住民に限定されるにとどまらない。つまり、集落を単位として農山村地域で行われる地域資源の適切な維持管理は、同時に環境や資源の維持・保全・確保という公共的管理としての役割をも担っているということになる。

過疎が進行しつつも条件不利地域における公共的管理を果たす地域資源の維持管理は、依然として集落を単位とする当該地域住民の手に委ねられている。財政的支援として中山間地直接支払制度等があるが、それで維持管理のすべての費用をまかなえるわけではなく、大部分は総普請等の名で残っている慣習的な地域の共同作業によるのが現状である。これらの共同作業は当該地域に人々が(全体として担い手の高齢化や減少を伴いながらも)居住しているからこそ続けられているものであり、もし集落の存続が限界に陥れば山や水の保全のために莫大な財政費用が

生じることになる。このことが、条件不利地域の生活や生産の一定の条件を確保しておくべき客観的要請とその根拠となるのである。

3. 農山村における生産・生活条件の確保

条件不利地域における地域資源の維持を相当程度まで行財政的対応に求めざるを得ないとしても、それだけで地域の再生産が可能となるわけではない。地域生活を支えるさまざまな生産や生活の条件は短期的に形成されうるものではなく、また個別に整備されてもうまく機能しないからである。都市部では居住地域が生産の場と一体化している地域が少ないために、主として地域生活に関わる課題は消費過程に関わるものが多いが、農山村では生活の場としての地域が生産の場でもあるために、生産条件と生活条件が一体のものとしてあらわれる場合も多い。例えば、農山村における水路は農業用水路としても機能しているし生活用水路としても機能する。また林道や農道はもちろん生活道路でもある。したがって、一定の戸数が農業を維持し続けることができなくなれば、それは同時にその集落の生活の共同条件の存続が危ぶまれるということになる。もちろん農業専業世帯が少なくなっていることは事実であるが、一方で生活条件の確保が生産条件を支えており、また生産条件を維持し続けることが、居住を可能とするような生活条件自体を支えることにつながっている。生産と生活の条件は常に相互に補完しあっているのである。

4. 地域の生産と生活の共同条件

これまで主として農村を例としてみてきたが、最後に、地域生活を営むための課題が決して農山村のみの課題でなく、地域社会一般の課題であるということ強調しておきたい。都市部では、生産の場が地域社会の手から離れて久しい。しかしながら、例えば道の駅等で売られる地物野菜が飛ぶように売れるのはなぜなのか、市民農園の応募者が順番待ちになったりくじ引きできめられたりするほど多数あるのはなぜなのかを考えると、都市で生活することのひとつの課題が見えてくる。

都市部における地域社会の役割についても農村と同様に、決して消費の場所としての家庭や地域としてのみとどまることなく、生産の共同条件をとりもどすという積極的な観点から取り組まれる必要がある。

一般的な人の生活時間が1日24時間というサイクルを基本とするかぎり、地域的限定や場所的固定性を必要としない資本の展開と人間生活とは相容れない矛盾がどうしても生まれてしまう。資本との関係で必要な労働力の再生産機能を果たし、また、資本の展開と人間生活の間にあるズレから生じる様々な矛盾（過密や過疎を通じて起こる共同生活条件の破壊や不足）を受けとめてきたのは、いつでも家であり地域社会であり行政対応であった。したがって、冒頭に述べたようなグローバルな経済の影響を一方向的に受け続けるのではなく、自律的に地域経済を営むことのできるような術を地域の中にいくつも重層的にはぐくむ必要がある。それは決して大規模な生産形態である必要はなく、むしろ小さく細かい術であればあるほど自律的でありうる。そして小さく細かい生産条件が無数の網の目を結んでいくことがその地域の自律性をより強固なものとすると考えられるのである。

